

おおらか教会

[ヤコブの手紙3章13～18節]

あなたがたの中で、知恵があり分別があるのはだれか。その人は、知恵にふさわしい柔和な行いを、立派な生き方によって示しなさい。しかし、あなたがたは、内心ねたみ深く利己的であるなら、自慢したり、真理に逆らつてうそをついたりしてはなりません。そのような知恵は、上から出たものではなく、地上のもの、この世のもの、悪魔から出たものです。ねたみや利己心のあるところには、混乱やあらゆる悪い行いがあるからです。上から出た知恵は、何よりもまず、純真で、更に、温和で、優しく、従順なものです。憐れみと良い実に満ちています。偏見はなく、偽善的でもありません。義の実は、平和を実現する人たちによって、平和のうちに蒔かれるのです。

[1] 牧師・主事会を終えて

先週の火曜日(7/13)、ZOOMを通し、オンラインでですが、北関東地方連合の**牧師・主事会**を開きました。今年度に入って1回目です。お互いの教会の近況報告をし合い、また、証しを伺ったり、話し合いの時を持つたりしました。参加が適わなかった方も5～6人程いらっしゃいましたが、全15人でしたか、新潟から埼玉までの北関東の教役者たちが同じ時間をオンラインで過ごしました。

普段はあまりそのような話をしないのですが、今回は「**牧師の心の健康(メンタルヘルス)**」のようなことも話し合う時間があった、これば私にとっては良かったですね。やはり、牧師、また教会主事の方もですが、どうしても教会の責任が与えられているが故に、ストレスをため込むことがあるということです。気付く疲れも気付かないような疲れもあると思います。そして、最も難しい点は、それをなかなか表に表せない、相談できない(したくないという事も)ということがあります。まあ、もちろん祈りの内に神様聞いて頂き、相談すればよいのですが、人の言葉を欲することもやはりあるのです。その意味で、きたかんの牧師たちの「それはわかるよ」とか「そういう時は私はこのように思うことにしているよ」とかいう一言がとても嬉しいのです。そこで、私はベテランの先生方や同じ年代の先生方の言葉に、ちょっと**心の掃除**が出来たと言いますか、とても癒された思いを持つことが出来て良かったです。

それも受けてのことですが、私は先週の日曜日の宣教を後で振り返ってみて、少々反省をしている事があります。私は皆さんに、もっと分ち合いをしましょう、

というような事を言ったかと思いますが、その時に「この教会は個人主義的な傾向があるかもしれない」と言ってしまったと思いますが、それは良くない表現でもあり、また私の見方が狭いと思いました。そのことについては訂正致します。「個人主義」というのは、個人尊重という意味では良いのですが、自分のことだけに目が行くという事でしょう。そんなことは無いですね。教会の礼拝にいらしている皆さんは、もうそのことによって教会の「交わり」を作っているのですから。

[2] 「神様に近づきなさい」とは

「個人主義」とは否定的な言い方をすると、自己充足とか自己本位ということになるでしょうか。今日のヤコブの手紙の箇所でも出てきます。「利己心」とか「利己的」という言い方がそうですね。ヤコブは身近な教会に警告しているのですね。せっかく神様が建てて下さった教会であるのに、自分を喜ばすことばかり考えるのはよしなさいと。それでは「交わり」がすぐに崩されてしまう。14節。「あなたがたは、内心ねたみ深く利己的であるなら、自慢したり、真理に逆らってうそをついたりしてはなりません」。16節には「ねたみや利己心のあるところには、混乱やあらゆる悪い行いがあるからです。」と書かれています。ヤコブは、出来たばかりのキリストの教会のリーダーとして、その交わりが、ともすると人間の舌(言葉)などをきっかけにしても崩れやすいものであることを(3章の前半などはそういうことが書かれています) きっと自分自身の弱さや至らなさも実感しながら思っていたのだらうと思います。けれども基本的に、教会のことを信頼しているから書いているのですね。これまでも「わたしの愛する兄弟たち」とか「わたしの兄弟たち」というように一緒にの所に立って呼びかけています。そして励ましています。13節で「柔和な行い」とか「立派な生き方」という言葉も、この教会の人にとっては嬉しかったと思いますね。

このヤコブの手紙が面白いのは、ヤコブの牧会上の苦勞みたいなことも見えることですね。何か具体的に頭を抱えるようなこともあったのでしょうかね。だから時に勢い余って、あなたがたはこのようにしなさい、という言葉がちょつとうるさく感じるような部分もあります。けれども、道徳的・倫理的な教えが多いなど思ってしまうのですが、よく読むと細々としたことは語っていないと思います。ヤコブの手紙は、突き詰めると、たった一つの本質的・信仰的な姿勢のことだけを言っていると思います。一番それがはっきり書かれているのは次の4章中の言葉だと思います。4章7～8節です。「だから、神に服従し、悪魔に反抗しなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げて行きます。神に近づきなさい。そうすれば、神は近づいてくださいます」。

ヤコブは「**神様に近づきなさい**」と言うのですが、「**近づく**」と言うと、自分の思いや決心を強くする、修行していくというように思うことがあるかもしれませんが。しかしこれはそのような「**上昇志向**」ではないと思うのです。むしろ、神様に近づくという事は、逆ではないでしょうか？ **私の力を緩めることだ**と思うのです。4章10節の言葉は大事だと思います。こうあります。「**主の前にへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高めてくださいます**」。—「**主の前にへりくだりなさい**」と。これが意外と難しい。これは「**自己に拘ることを捨てる**」という事だと思います。詩編の言葉で言うなら、「**力を捨てよ。知れ。わたしはあなたの神**」(詩編 46 編 11 節)という言葉と同じような意味だと思います。「自分・自分」と思っていた心をもっとおおらかにする、「隙間」を作ることではないでしょうか？ この詩編 46 の言葉は、口語訳では、「**静まって、わたしこそあなたの神であることを知れ**」でした。

[3] 「偽善者を出す所」

往年の名説教家で、**渡辺善太**先生という牧師がおられました。その渡辺先生の説教集『日本の説教 9』(教団出版局) というのが出ているのですが、その一番最初に紹介されている説教の題は皆さんちょっとビックリされるかもしれませんが。「教会」のことを語っているのですが、そのタイトルは、『**偽善者を出す所**』というものです。1954年と言いますからもう67年も前のものです。でも古くないのです。ヤコブも今日の3章17節で「**偽善的**」という言葉を用いていますが、信仰者の集まりがなぜ偽善的になりやすいのか。渡辺善太先生はこのように語っています。

「教会で教える道徳的のことは、他人に見せるためのものではない。そしてしれ自身に究極的な価値を見ているわけでもない。しかし教会の中には、教会道徳というようなものがいつの間にか出来上がって、それが会員を縛るようになる」。分かるような気がしますね。そして渡辺先生は、信仰者の「**良き行い**」というのは「**証言的なもの**」であると言うのですね。その根拠は、**マタイ福音書 5章 16 節**だと言います。「**そしてあなたがたの良い行いを見て、天にいますあなたがたの父なる神をあがめるようにしなさい**」。自分が崇められるのではないのですよと。神様が崇められること、神様が生きておられることを証言することが大事だと。

渡辺先生の言葉をもう少し引用します。こう語られます。「我々はもう一度教会から偽善者が出る、という非難に立ち返って考えなければならない。それは今述べたような「**証言としての**」善行(良き行い)を、格下げして人間的善行とし、「**神の前**」に行われるべきそれを「**人の前**」に行うものとし、縦に見られるべきものを横に見られるべきものとするために起こってくる過りである。したがって教会には不断にこの種の誤りに陥る会員のあることは避けられない。むしろ

その誤りがあればこそ、正しい意味の善行が、改めて考えられるようになる。故に結論的に言えば、教会に偽善者のあることは避けられない。しかし、それによって教会は信仰的に飛躍することが出来るのである」。そう言い切っています。

私たちはどこまでも「人の前」にではなく「神様の前」に生きることが大事だと。そうでないと、鼻高々な人間の集まりになってしまう。ヤコブの手紙は、それを忠告しているのですね。14 節に「**あなたがたは、内心ねたみ深く利己的であるなら、自慢したり、真理に逆らうそをついたりしてはなりません**」とある通りで、これは上から、神から出たものではないよと言うのですね。その通りでしょう。けれども、私は渡辺先生が、**このことは避けられないのだ**、と言われたことがとても大事なことだと思うのです。私たちは 100% スッキリ行かないのです。どこかいびつなのです。むしろ、そのことを知っておくという事こそが大切なのではないかと思います。私たちは、偽善者なのです。そういった部分がどうしてもある。病んだ部分があるのです。私自身は本当にそう思います。だからこそ、だからこそ、イエス様は天のみくらも捨て、私たちの所に来て下さったのではないですか!?

3章17節の言葉は美しいです。「**上から出た知恵は、何よりもまず、純真で、更に、温和で、優しく、従順なものです。憐れみと良い実に満ちています。偏見はなく、偽善的でもありません。**」けれども、教会を理想郷のように考えるのも無理があると思います。これはまず何よりも**主イエス・キリストの思い**です。教会は、このキリストによって救いを頂いたお互いが作っている交わりです。いつでもこのキリストの思いに立ち返ることが出来る。「**キリスト・イエスの心を心とせよ**」(ピリピ 2:5 文語訳)という御言葉がありますが、これは私は、自分のことばかりでぎっしり詰まっている**あなたの心を、キリストに向かってもっとおおらかにしなさい**、ということではないかと思っています。あくまで素のままよい。あなたは、そのままのあなたとして愛され、赦されている。あの人もそうだ、この人もそうだ。先日の牧師・主事会である牧師が「**教会員は皆それぞれの文化が違うから、それを受け入れることを学んだ**」と言われました。私自身に言われたように思いました。

私たちは誰かを見る時に、**その方をキリストだと思ったらよいのかもしれませんが**ね。そうするととてもおおらかになれますよね。親の姿の中にキリストを、家族の者の中にキリストを、教会のあの人の中にキリストを。私たちの教会も、川越“**おおらか教会**”にしたいとさえ思ってしまいます。**ヤコブ 3:18。「義の実は、平和を実現する人たちによって、平和のうちに蒔かれるのです。」**—キリストの平和が私たちの日常も教会も御支配して下さるよう、これからも祈りながら一緒に歩んで行きましょう。このお方の大きなご愛の「外」にいる人は誰もいません。お祈り致します。

